

『ももんが』一九九一年七月号

一九五三

八月二十八日 金曜

食事に出ようとして下りて行つたらドゥニーズが手紙が来ていると言つて渡してくれた。昨日来たのではないかと思つたが黙つて受取る。二十九日（土）午後七時半夕食にお出下さいという文面である。一旦部室へ戻り日本の絵はがきに参考しますという返事を書く。ゴブランの辻の近くの郵便局持つて行つてきいたら十二フランだった。この近くだから今日中か、遅くも明日ひるまえ届くだろう。

今日は頭が疲れていないうちにケイへ行つてモンゴルフィ工の熱気球の版画を探すこととした。彼は三回実験しているのだが、三回とも同じ位の大きさに描いたのが見つかった。一枚二〇〇フランだった。それからサン・ミシェルのプレス・ユニヴェルシテールに入る。科学史研究年報「タレース」第六号（一九四九—一九五〇）と第七号（一九五一）を買う。どちらも定價五〇〇フランと書いてあるのに両方で九七七フランだという。この勘定はどうも分らない。一号から五号は持つているのである。

十二時になつたのでルクサンブル公園で休む。それからオブセルヴァトアルの方へ向つて歩き、ロシュローという通りからアヴェニュー・デュ・パルク・ドウ・モンスリを少し行くとモンスリという小じんまりした公園がある。前に一度来たことがあるが、この公園は好きだ。ここを南の方へ抜けるとシテ・ユニヴェルシテールが見える。

それからサン・ミシェルへ戻りパンテオンへ入つてみる。入場料五十フラン、階段を下りるとルソーやヴォルテールその他の名士の墓がある。案内人が説明して呉るので十フラン渡して外へ出る。植物園の入口の近くル・シャレーというカフェで休む。それからポール・ロワイヤル街の前に行つたことのある床やヘ行つて髪を刈つてもらう。といつても横と後の髪の毛を少し切つてオー・ドゥ・コロンをふりかけて終りだ。日本のように丁寧に顔を剃つて鼻毛まで切つてくれるのではない。顔は自分で剃るものと定つてゐるらしい。それで三二五フラン。

金曜日にはルーヴルの夜の展覧（一一・一三・三）があるので行つてみた。なるほど外側にもイルミナシオンがある。中へは入らずチュイルリ公園を抜けてエトアルまで歩きメトロで帰る。

八月二十九日 土曜

朝食をすませて宿へ戻り、帰りのプランを考えたりなどする。

晝食に出たあとぶらぶら歩いて古本屋を見る。今日はたいしたもののは無かつた。オーステルリツ橋のたもとの喫茶店で茶を呑んで宿へ帰る。

七時半セルジエスク教授のうちへ夕食に招かれているので少し前に行く。ポーランドの化学者というお婆さんが相客に呼んであつた。この人は英語を話すといふ。私がフランス語に詰まつたとき助け舟を出すよう準備されていたわけだ。私はドイツの学者と連絡を取りたいと思って、日本を立つ前にアルテルト教授に手紙を書き、イスラエルの會議のあとお訪ねしたいが御都合を國際會議事務局の方へお知らせ願いたいと申し送つてあるが、まだ連絡がとれない話をしたら、セルジエスクがそれではマインツのディープゲンを訪ねてみてはどうかと言つて紹介状を書いてくれた。帰りがけに教授がパリを立つ前にもう一度来ませんか、と言うから、それでは火曜の夜、夕食後にお訪ねしますと言つて辞去した。私の宿は教授の家からすぐの所である。

八月三十日 日曜

このあいだコンセルヴァトワール・デ・ザール・エ・メティエへ行つたとき、だいぶ見落したのでもう一度見ることにする。案内書を持っているのかと言うから、持つていると答えると入場料は払わなくてよいとのこと。これは愉快な話である。今日はパスカルの計算器をしげしげと見る。パスカルの父は税務署の役人をしていたので計算に夜を更かすのを見ていた彼は父の骨折りを省くため歯車仕掛けの器械を考案したのだという。われわれが戦時中まで使つていた計算器はこれに手を加えたものに他ならない。

それからアンペールが電気の流れている針金の間に働く力の実験をした装置、またクーロンの実験など。

十二時まで見て外へ出る。それからペール・ラ・シェースの墓地へ入つてみる。

入口にアラゴーの墓が第四区にあると書いてある。留学生が金が無くなると墓地の中を散歩するという話をきいたことがある。ぶらぶら歩いていると立派な墓がある。アラゴーの墓には行き当たらなかつたが、探そうとするほどの気力もないので外へ出た。

それから今度はピュット・ショーモンという公園へ入つてみる。山や谷がある立派な公園である。人工の瀧もある。四時ごろ宿へ帰つてひるねをする。

八月三十一日 月曜

ひる近くまで宿にいる。晝食に出たあと左岸を歩いてポン・ダルコルを渡つて右岸へ出る。サン・ジャックの塔を見る。チュイルリ公園を歩いて宿へ帰りひるねをする。明後日はフランクフルトへ行くので、心身ともに休ませておくことにする。

今日ゴーロワズという安煙草を買つたら八十フランだつた。三年前は六十五フランだつた。また五フランだつたマツチが七フランになつていた。先だつて幾らかましなバルトーというのを買つたら百四十フラン、この前は百二十フランだつた。おおむねこれくらい物の値段があがつている。さつき街を歩いていて何気なくショーウィンドーを覗いてみたら、オーバー一万フラン、ヅボン三千フランと書いてあつた。もちろん安物である。

九月一日 火曜

大使館へ行つて郵便をしらべたらドイツのアルテルト教授の手紙がイスラエルから転送されていた。開いてみると九月十日以後に来てくれまいと書いてある。また九月二十五日から二十九日までドイツ自然科学史、医学史学会があるから、それに出ませんかともある。しかしそれまで滞在するわけにはいかない。

エトワールの廣場のベンチに腰をかけて休んでいると、あるマダムがアヴェニュー・フォッシュは何方ですかと尋ねるので、手に持つていた地図で確かめてあれですと答えた。前にも何度か道をきかれたことがあるが、まことに開かれた世界という感じがする。

帰りにサン・ミッショールのブレス・ユニヴェルシテールへ行つて本を少し買う。アルド・ミエリの本に定價一五〇〇フランと書いてあるのに一四五フランだつた。つまり三五フラン値引きした勘定だ。日本では、こういうことは無いようだ。

宿へ帰つてゆつくりページを切つて行つたら一一一四ページある。一ページが一
フランと少しだから本は安いものだ。

夕食後約束通りセルジエスク教授宅を訪ねる。アルテルトからの手紙のことを話す。この前招待されたとき、アルテルトとまだ連絡がつかないことを話したらディープゲン教授を紹介して呉れてあるから、今日のことを予見したかのような結果になつた。アルテルトもディープゲンも医学者である。

夫人がミュゼー・ギメーを見ておく方がよいと言うので、有難う明日行きますと言つて十時半辭去する。

九月一日 水曜

ゴブランのクレディ・リヨネーというのへ行つて旅行小切手をフランに替えようとしたら、オペラの銀行だというので其処へ行く。一ドルが三四九フランだという。三〇ドル替えてもらう。それからメトロでイエナへ出てギメー博物館を見る。これは見てよかつた。

宿へ帰つて払いをすませる。少し余つたのでもう一度プレス・ユニヴェルシテールへ行き、前に見ておいた科学古典叢書というような小型の本でダランベール、ラプラス、アーノルト・レイモンの「科学史と科学哲学」など買う。

三時四十五分、宿に別れを告げてアンヴァリドのエール・フランスの事務所へ行く。

フランクフルト行は客がいつぱいだつた。七時ライン＝マイン着。エール・フランスで宿を世話してもらつてアトランティックというホテルへ着く。一休みして町へ出て見る。汽車の駅を見ておく。明日マインツへ行くつもりである。汽車は三〇分おきくらいにあつて、マインツは三〇分で行けるという。

ドイツへ来たのだからビールを呑む。アーベンド・ポストという新聞を買って見ていたら、十月十五日朝鮮会談が開かれると出でていた。

九月三日 木曜

フランクフルトの宿も素泊りにした。それでも一九マルク五〇ペニッヒだつた。今朝八時ごろ起きる。昨夜フリューステュックという看板の出ている店を見つけ

ておいたので行つてみたらまだ閉つている。本屋で町の地図を買う。初めフルンクフルトのカルテを呉れと言つたら絵はがきをだしたので、ランドカルテだと言うとシユタツトプランかと言つて地図を出してくれた。二マルク五十ペニッヒだつた。

駅の方へ歩いて行くとシバイゼハウスというのがあつたから、そこでパンを食い茶を呑む。ここの一チエーはうまくなかつた。駅の二階に郵便局があつたので絵はがきを一枚日本へ出す。一通につき七十ペニッヒ。マインツ行の切符を買う。二マルク六十ペニッヒ、一〇時一六分発、グライス四と教えてくれた。グライスとは何のことかと思つたら乗場のことであつた。

切符を見せて入ろうとしたら、これはシユネルツークだから一マルクだという。ここで払うのかと言うと、ドルトつまり乗つてから払えばよいとのこと、と書いてある所へ乗る。むかし日本にもあつた三等車だろうが仲々きれいだつた。車掌がきたから一マルク出して急行券を受取る。森や河が見える。河はマイン川であろう。このフランクフルトは正確にいうとフランクフルト・アム・マインでマイン河に臨んでいる。

三〇分くらいでマインツに着いた。駅前でお巡りさんに大学へはどう行つたら良いかときいたら、という電車が大学へ行くという。その電車に乗る。二十ペニッヒ。大学構内は人気がなかつたが一人女子学生かと思われる人がこつちへ歩いて来るから、医学部はどうちかきいたら横柄に「あつち」と言つて指した。「ダンケ」とだけ應える。

医学部へ行つてディープゲン教授はいるかときくと、フェリエンで九月十一日でないと来ないという。なるほど夏休みか、いまごろ訪ねる方が聞違つていたのであらう。持つて来た論文別刷を托して帰る。

駅前へ戻つて賣店でマインツの地図を買う。その拍子にけさ買った新聞フランクフルテル・アルゲマイネを置き忘れてしまつた。駅前のプラツツでベンチに腰をかけて地図を眺める。マイン河がこの近くでライン河へ合流しているのである。河の方へ歩いて行きラインの岸辺でしばらく河を眺める。風が強くてかなり涼しい。

駅へ戻つて普通列車に乗る。今度は木の腰掛で今朝乗つたのよりだいぶ落ちる。

各駅停車で駅が八つくらいあった。約一時間かかつて二時半フランクフルトへ着く。駅前のフリードリヒ・エーベルト・ストラッセという大通りでコーヒーを呑みパン菓子など食う。その隣りの通りがミュンヒェン・ストラッセでその六〇番地にSAS（スカンディナヴィア航空会社）の事務所がある。九月二一日カイロー東京をきいたらコペンハーゲンヘリクエストするから明朝来てくれとのこと。

地図をみながらゲーテ・ハウスへ行つてみようとしたが、間違えたのか見当らない。マイン河の岸で少し休み、地図を見直して行つたら見つかつた。一マルクの入場料を払つて入る。仲々丁寧な説明がついた。ゲーテはセビアのインクを使つていたのだろうか。それとも変色してこんなになつたのだろうか。小富さんがセビアのインクを使つているのは此処から来ているのではないかと思う。

宿へ帰つたら六時だつた。今日行つたマインツ大学はゲーテンベルク大学といい、庭にグーテンベルクの石の胸像が立つていた。アルテルト教授へ手紙を書く。夕食に行つたシバイゼハウスのオーバーにミュンヘンまで何時間かかるか尋ねたら、急行で五時間、二〇〇キロだという。日帰りは無理だ。

九月四日 金曜

昨日の新聞にスコットランドに低気圧があつて当地方は少し雨氣があると出でいたが、今朝起きてみると良い天氣である。昨夜行つた食堂で食事をする。駅の郵便局でアルテルトへ手紙と別に論文別刷を発送する。ドイツ国内の手紙は十二ペニッヒ、印刷物は目方を測つて二十ペニッヒだつた。

大学の近くにあるゼンケンベルク博物館へ入つてみる。正確な名称はナトウールムゼウム・ゼンケンベルク、道理で博物の標本が多い。建物がだいぶ壊れている。アウフバウのため寄附を乞うと書いた箱が置いてある。

一一時少し過ぎスカンディナヴィア航空へ行く。九月二十一日のカイロー東京は満席のよし。しかし空席待ちのリストに入れておくからローマで聞いてみてくれどいう。明日のチュー・リッヒ行をスウェイス航空へ問合せてもらつたら、早い時刻のはないが一八時があるのでそれを予約する。スウェイス航空の事務所はフリードリッヒ・エーベルト街二四番地だから、そこへ行つて九月七日チュー・リッヒからミラノ行をリクエストする。明日分るという。

地図に歴史博物館というのがあるから行つてみたら、そこと思われる所は壊れ

た建物ばかりである。戦前の地図と見える。電車で駅まで行つてそこの中食堂へ入る。ワイーネル・シユニツツエルを注文したら何のことはないカツレツだ。キルシユを呉れといつたが発音がわるいのかボーアイが少し考えた様子でキルシユ・ワツサーかと聞き返した。そうだと答える。すると実に小さなコップに注いだのを持つて来た。キルシユはこんな小さな杯で呑むものなのか、敗戦國の貪しさのか、自分は判断できない。こんな食事で五マルク八十ペニツヒだつた。

駅前通りを歩いているとタウヌス・アンラーケという公園があつたので入つてみる。ベートーフェンの像があつて「アム・ゲニウス・ベートーフェンス」と記してあつた。フランクフルテル・アルゲマイネという新聞を見ると東京にかなり大きい地震があつたが、人命の損害はなかつた由。木曜日というから昨日だ。またピカール教授の潜水のことも出ていた。カブリの海で一〇六メートルまで潜つたという。

帰りに宿の近くの道ばたへ葡萄の籠を並べて賣つている小母さんがいた。白っぽいのと紅っぽいのとあるから「ウェルヘ・ジユーセル?」ときくと「バイデ・ジユース」と應えた。なるほど。私は甘味がちのと酔っぱいとの違いをきいた積りだつたが、どつちが旨いかと聞かれれば賣る側としては「どつちも旨いよ」と答えるに定まつている。結局白葡萄の房を買ってビタミンの補給をすることにした。

九月五日 土曜

朝食に出たついでに駅まで行つて時計を合せておく。フランクフルテル・アルゲマイネを買つたら今日は四十ペニツヒでだいぶ厚かつた。一昨日地図を買つた本屋へ入つてみる。ブルクハルトの「ギリシア文化史」第二巻がある。第二巻は「芸術と研究」である。第一巻はなかつたが「國家と宗教」であることが第二巻に出ており、カバーに第三巻は準備中である。ドイツへ來た記念に第二巻を買う。十一マルクである。第一巻はもしもあつても直ぐ読みそうにないから、第二巻で丁度よかつた。

昨日歴史博物館を探したとき見つからなかつたのは地図の見方がわるかつたのかも知れないでの、もう一度行つてみたらあつた。昨日は壊れた建物ばかりだと思つたが、残つた部分で展覧しているので見落したのである。入口の横に開館時間が書いてあるが、都合がわるいので入るのは止めた。

これまで單に駅とか駅前と書いて来たのはハウプトバーンホフで、ほかにオストバーンホフのあることが地図で分つた。そのハウプトバーンホフの賣店でブライトヴルストを旨そうに食つている人が大勢いるので試食してみた。直径五センチ長さ十センチくらいの腸詰をブラー・テンして芥子をつけパンの小片がついてハナペニッヒだつた。ドイツ的な味とでも言うか仲々うまかつた。

フリー・ドリヒ・ストラツセを歩いてゲーテ広場へ出る。ゲーテ像の横手の日かげに石の段があつて余り人相の良くないのが屯しているが、構わず腰をかける。ゲルベゾルテの封を切つたら隣の男がマッチを擦つて火を差出したので、それで火をつけ、有難うという代わりに煙草の箱から一本進呈する。そしたら彼は「ホイテ、ヴァルム」と言つたものだ。もう九月五日だから東京では残暑というところだが、マインツでラインの川風に吹かれたときは涼しかつた。「今日は暖かいね」というのも時宣を得てゐるのであろう。彼の隣にいた男が「ゲルベゾルテ！」と言つたようだつたが、その男にまで振舞うのは止めて間もなくそこを離れた。

ゲルベゾルテというドイツ煙草の名を知つたのは二十年以上前のことである。そのころドイツ留学から帰つた某氏がこの煙草をすつていて、いい香りだなと思つたので覚えていたのである。フランクフルトへ来てそれを思い出して今朝買つてみたのである。

それからスイス航空へ行つて昨日リクエストしたチューリッヒミラノ行はとれなかつたので、チューリッヒで調達することにする。五時宿へ帰り飛行場へ行く。七時少し過ぎ出航、途中ストゥットガルトへ下り、ここでパスポートの検査があつた。八時五五分チューリッヒ着。スイス航空の事務所で八日火曜のミラノ行を予約する。オテル・デュ・テアトルという宿を世語して貰つた。朝食つきで一九スイス・フランだ。フランクフルトの宿よりずっと良い。風呂つきである。大体箱型で途中に段の着いた浴槽で洋風のバスよりも寧ろ日本の風呂に近い感じだ。

一九五三

九月六日 日曜

三年前飛行機が給油のためか何かでこここの空港で一時間余りとまつたことがある。そのときは夜中で何も見えなかつた。それとAINシユタインがこここのティニツシェ・ホーホシユーレの助教授をしていたとき石原純が訪ねて一学期間滞在したことがある。そんな気持で今度途中だから降りてみたのである。

この宿の朝食にクロワッサンとドイツ風のパンと両方出た。そういえばジュネーヴでもそうだった。フランス語とドイツ語が公用語であるのに対応している。ジャムがうまかつた。このホテルの建物の一角に映画館があることが分つた。オテル・デュ・シアールトルというのはそれから来ているのだろう。映画だけでなく、劇場もあるのかも知れない。

しばらく部屋でブルクハルトを読んだが、掃除に来たからそれをしおに外出する。宿で地図をくれた。明日は月曜で博物館がやすみだらうから、地図を見てシユワイツェリツシェス・ランデスマゼウムというのへ行く。この国の歴史を物語る種々のものが展示してあつて面白かつたが、半分も見ないうちにベルが鳴つたので外へ出る。開館一〇一二時、一四一七時となつていて

街で「ラ・スヴィス」という新聞を買い。喫茶店でゆつくり休む。午後二時からもう一度さつきの博物館を見る。ここは入場無料だ。コルネリの地球儀があつた。ヴェネディッヒ一六八五と説明がついている。もちろん日本も出ていてジャポーネとイタリア語で書いてある。天球儀もあつたが一つは十八世紀、もう一つのには説明がついていなかつた。その他コスチュームや先史時代のものなど種々あつた。晩はホテルのレストランで食事をする。このレストランは「アルコール抜き」だつた。別に困りはしないが、ケーベルさんはエッセン・オーネ・トリンケンなんて考えられないと言つたそうだ。しかしたいして呑むわけではなく、ワインを少し呑んで頬をあからめたと久保勉は伝えていて。夜はブルクハルトを読んだ。旅先でたまに読書するのも良いものだ。

九月七日 月曜

駅にくつついでいる郵便局へ行つてはがきを日本へ出す。駅前通りを歩いて行くと、アルペンケイという所があつた。山の方はかすんでいてアルプスは見えなかつた。それからチューリッヒ大学とテヒニツシェ・ホーホシユーレが並んでいる所へ行つてみる。地図をみると余り遠くない所にクンスト・ハウスというのがあるので行つてみる。古代ローマに関する特別展が開かれていてミラノやヴェネツィアから借りたものがある。ローマで似たような彫刻を見たような感じがするが無論別物である。バーゼルやチューリッヒもある。常設の方はフランス印象派の諸家のものやもう少し古いところではオランダの画家のものがあつた。モネの水蓮の大作は印象に残つた。四時ごろ館内の寒暖計を見たら二二・五度であつた。

「ラ・スワイイス」を買つて読む。昨六日ドイツ總選挙の結果、アデナウアーの民主キリスト教派の方が社会主義派より優勢と報じている。フランスはアデナウアーの方を歓迎していると昨日の「ソワール」に出ていた。土曜日（昨日）ギリシアのコリントの近くに地震があつて、コリントの地峡は当分船の航行禁止の由。コリント近辺の人は屋外で夜を過ごしたという。

晩にシユワインスコレットというのを食つた。ひどく脂っこいやつだ。昨夜の葡萄は余り旨くなかったので今日はアイスクリームにした。そのホテルにはラジオがついている。スワイッチを入れたらイタリア語が聞こえて来た。ダイアルを回すとフランス語のアナウンスがあつてドゥビッシーの曲が流れて來た。

九月八日火曜

郵便局へ行つて日本へ手紙を出す。ゲスナーストラッセを通つたら薬屋のような店があつたから、字書を引いて覚えたパト・ダンティフリスを呉れというと、コルゲートがいいかと聞き返したので、否スワイイスのが欲しいと答える。アルペンケイで「ラ・スワイイス」を見るとギリシアの地震はまだ余震が続いているという。数日後アテネへ行くのは支障なさそうだ。

晝は宿でウルスト・サラートというのを食う。宿の勘定を済ませる。着いたとき確かに一泊一九フランと聞いたが、勘定書では一ハフランだつた。二時宿を立つてバーンホーフにあるスワイイス航空へ行く。余つているスワイイス・フランをリラに替えてくれるというから二五フラン出したら三五五〇リラ呉れた。

飛行機は予定通り一五・三〇に飛び立つた。ミラノ着は一六・四五のはずだが、それより少し前に着いてしまつた。空港で一〇ドルをリラに替えて貰う。一二、三〇〇リラ寄越した。一ドルが六一五リラである。すると一円が一・七リラくらいか。

町までバスで一時間たっぷりかかりハリラ取られた。会社でプリンチペ・エ・サヴィアというホテルを紹介してもらう。仲々よい室だつた。バスつきで三〇〇〇リラ。食後ちよつと町へ出て郵便局を見つけた。

九月九日水曜

七時少しすぎ起きた。朝食は宿の庭園へ案内されてそこで摂つた。八時半ごろ出かけて昨夜みつけた郵便局へ行つたらまだ開いていなかつた。地図で見当をつけてドゥオーモへ行く。中を見てから千リラ出して屋上へ上つてみる。一周して下りてからピアツツア・デ・スカラの方へ行つてみる。スカラ座を外から眺める。その近くにレオナルドの像がある。それからヴィア・ダンテを通つてピアツツアカステロへ出てカステロ・スフォルツェスコを見る。スフォルツア公の城である。

そこを抜けて公園に入り一休みする。さつき買った「フィガロ」は昨日のだが、ギリシアの地震のことはもう出ていない。公園の向うがポルタ・セムビオーネでアルコがある。パリのカルーセルの門に似ているが、こつちの方が古いのかも知れない。そこから少し歩いた所で郵便局をみつけたので持つてゐる絵はがき数枚を出す。日本へのはがき一枚が航空便で一ハリラだつた。

コルソ・マジエンダという通りを歩いてサンタ・マリア・デレ・グラツィエへ行く。お堂の中をちょっと見て、その隣りの博物館になつてゐるレオナルドの「最後の晩餐」の壁画を見る。ここに入場料二〇〇リラ、記念に買った絵はがき三五リラ。

そこを出たら一二時になつた。ポルタ・マジエンタで茶を呑んで軽い食事をする。一時間ばかり休んでから、今度はサン・タンブロジオという教会を眺める。古めかしい建物である。次にアムブロジアナ図書館というのへ行つてベアトリチエ・デステを見ようと思つたが、持つていた地図が簡単すぎたのか、道を間違えたのか目的のものが見つからなかつた。案内記を出してみるとヴィア・トリノから行くと書いてある。そこでトリノという街を歩いてみたが、やはり見つからなかつた。しかしそれは是非見たいと思つたわけではなく、レオナルドを見たこと

で満足したから、もう一度ドゥオーモを眺め、そのあたりをぶらぶら歩いて五時ごろ宿へ帰る。

晩は町のレストランへ行つてみようと思つて宿から割合近い所の小さな店へ入る。入口のドアに今晚のメニューが張出されてあるが、それほど通ではないからいきなり入つてスパゲッティその他を食つ。細長い棒のようなパンはグラシーノというのだそうだ。

九月一〇日 木曜

七時に起きる。今朝も朝食は庭園でとる。宿の支払いをする。七八 リラだつた。勘定書にテレフォンというのが一つもあつて、それぞれ六〇となつてゐる。何の電話料だから知らないが面倒だから黙つてゐる。今日はローマへ行つて泊まるのだから飛行場は國內用の小さいもので町から近かつた。タクシーのメーターに二八 と出たから三〇〇渡した。

飛行機は一〇時ミラノ発、一一・四五ごろローマ着。前に泊つたアルベルゴ・ロマーノという宿はイタリア航空事務所のすぐ近くだから、ポーターの少年に荷物を持たせていきなり行つたら満室だといつて断られた。L A I へ戻つてホテルをきいて貰つたが仲々見つからない。するとポーターの少年がベンションならある、と言つて連れて行つてくれた。アルベルゴというベンションへ泊ることにする。

晝食もここができるというから便利だ。二時ごろスカンディナヴィア航空へ行つて二十一日のカイロー東京はウェート・リストになつてゐるのだと訊ねると、コペンハーゲンへ問合せるから晩に来てくれとのこと。明日のアテネ行きを調べて貰つたら一四・二五のTWAがあるので予約する。一二・四〇までにTWAの事務所へ行くこと。

日本を立つ前稻沼君から、九月上旬ローマで微生物の会議があつて、カイロにいる川喜田君がそれに出席するはずだから、カイロの宿など紹介してもらはうとい、というアドヴァイスをもらつてゐる。それで會場になつてゐる大学の方へ行ってみる。理学部へ行つたら會議事務所が見つかつた。今日は見学か何かで事務所は閉つていたが、日程表が貼り出してあつて、明日の発表の中にオガタという人の名が目についた。人影がないので街へ戻る。

ピアツツア・ディ・フォンテンの近くにクック旅行社があるから入つてみる。ギリシアの旅行について少し訊ねておこうかと思つたのである。すると日本人が二人で話していた。微生物の會議に来られたのかと聞くとそうだと言う。川喜田さんは来てますかというと、さつきまで一緒にいたんだが、またこれからその宿へ行くのだとこと。私も川喜田さんに會いたいから同行を頼む。

まだ時間があるので近くの茶店へ案内する。そこはもう何度か休んだことのある店である。二人の日本人は水野傳一君と遠藤元繁君といい私より少し若い人たちはあつた。私は科学史の會議のあとぶらぶら歩いているのだと話す。川喜田さんの宿はそこから近い所だつた。初対面のあいさつをすると稻沼くんから連絡があつたそうで、カイロへ行つたら自分が宿にしているオтель・デ・ローズを使うようにとのこと、宿へ手紙を出しておくと言つてくれる。

そこを辞去してスカンディナヴィア航空へ行く。リクエストしておいた二一日カイロー東京を確認した。その係の男は寿という字のついた金の指輪をしているので、いい指輪だね、シナのかと言うと、そう父がキャプテンで軍艦に乗つていたのでシナで買つて来たとのこと。たいてい係員の名札が出ているのだがそのときは出ていなかつたので名前をきくとディ・プラツツィアーノという青年であつた。ペンションへ帰つて夕食をとる。ホテルよりも余程よい。いい経験をした。

九月十一日金曜

七時半ごろ起きた。くもつている。九時ごろエール・フランスの事務所でドルをリラに替えてもらう。少し降り出したがかまわずピアツツア・デセドラの方へ歩いて行く。郵便局が見当らないのでお巡りさんにきいて郵便を出す。それからコロセウムの方へ行く。前に来たときは外から見ただけだつたから今日は上つてみようと思う。一階の入口で入場料百五十リラ払う。二階を一周して三階へ上の三階まで行かれるようになつてゐる。

十一時半ごろペンションへ帰る。晝飯は一時からだというので、十二時少しすぎ立つ。エレベーターの前で日本人に會つたから微生物の會議かときくとどうだと答えたが、名乗りをあげる暇もなくエレベーターが来たのでさよならをした。TWAの事務所でバスを待つてゐるとき雷雨になつた。一時近くバスが出たところはほとんど止んだ。飛行場へ着いたときまた少し降り出した。

飛行機は三時ごろ飛び立つた。座席は前から一番目の窓際だつたので翼が邪魔

になつて外は余り良く見えない。六時アテネ着。時計を一時間進めて七時にする。少し東へきたわけだ。TWAの事務所で一七日のカイロ行きをきいたら明日返事をすること。宿は少し離れているがリドというホテルを紹介してくれた。ギリシア語のメニューにはまいつたがボーアにきいていい塩梅の食事をした。

九月一二日 土曜。

昨夜この宿へ着いたときは夜で分からなかつたが、ここは海岸であるからアテネの南である。ホテルのすぐ前にバス停がある。ここが終点であるからアテネ行はここから出るわけだ。アテナイはギリシア文字でも読むことができる。九時ごろそのバスに乗る。しばらく行くと左手にアクロポリスの丘が見えて来た。やがて街に入りバスが留つたとき乗客はほかに一人もいなくなつていた。さて何処かなと思つたら運轉手さんが振返つて「テルマ」と注意して呴れた。さては終点かと思つて降りる。電車賃が千三百ドラクマだからギリシアもたいへんなインフレーションである。

昨夜空港では一〇ドルしか替えてくれなかつたので銀行を見つけて五〇ドルばかりギリシアの金に替える。次に郵便を出したいと思ってお巡りさんにきいたが通じない。少し歩いていると郵便ポストがあつた。手紙を入れようとしている人がいたから、切手はどこで賣つていますかと訊ねたらこの中だという。入つてみると大きなホテルだつたが、その一角で切手を売つていた。日本への航空便が七千ドラクマだという。

丘の方へ行こうと思つて歩いていたら風の塔へ出たので暫らく眺める。それからパルテノンへ行く。案内書「ギード・ブルー」には入場無料と書いてあつたが千三百ドラクマ取られた。修理などしているようだから無理もない。エレクティオンというのは仲々良い。丘の南の方から下を見ると野外劇場が見える。北側へ回ると下にさつき側を通つて來た風の塔が見える。しばらく丘の上を歩き、それからテセイオンを見る。

十二時になつたので下りて憲法廣場という賑やかなところで喫茶店に入り菓子など食う。するとフィリッピンかと言つて話しかけて來た男がいた。捕虜で福岡にいたことがあるそうで、スキヤキなどの日本語を知つていた。そのあともう一人話しかけて來た男がいた。ここはもうヨーロッパではなくアジアなのだ。コーエーもフランスいうカフェ・テュルクで、こさずに上澄みを呑むあれだ。

それから聖ガオルギオスという丘へ登つてみる。余り人は居らず、唯一人だけ見かけた。上に教会があつて其処へ行つておまいりをするのだと言つていた。私はそこまで行かず町の眺望を楽しんだのち下りることにした。途中サボテンに実がなつていた。イスラエルでもこういう光景を見て來た。

TWAの事務所へ行つて昨日頼んでおいたカイロ行の座席をきいたら十七日のが取れた。それからクック社へ行つてワゴン・リのことをきく。火水(一五・一六)一泊二日コリントを越えてアルゴスからナウプリオンへ行く座席を予約する。一二ドルであつた。それから公園へ入つてみる。木がよく繁つている。寒暖計があつたので見ると二六・五度であつた。時刻は四時半であつた。

帰りはエダムと書いてあるバスへ乗ればよいのだ。今朝は時間のことを考えなかつたが終点まで二五分くらいである。宿へ帰つて風呂に入る。少しぬるかつたが、さっぱりした。

九月一三日 日曜

九時半バスで町へ行く。地図をみながら國立ベナキ博物館へ行く。アシエット社の案内書には室数がかなり多いように書いてあるが八室くらい見たら終つてしまつた。館員に訊ねたらこれで全部だという。目録を手にとつてみると一九三五年版で蠅の糞でもついたのか汚れたのが一つだけあつた。やめようかと思つたが後日の参考のため買つておく。

十一時そこを出る。正面は國立公園である。そこを通り過ぎてゼウスの神殿へ行つてみる。柱が一本倒れたのがある。一本の柱は十四乃至十五箇の石を積ねてできている。それぞれの厚さは一定していないうだが、全体の長さは正確に定つているようである。

公園前でサンドウィッチを買い公園のベンチで食つていたら、キナかと言う男がいたが面倒だから相手にせず。やがて空がくもつて雨が来そうになつたのでバスに乗りエダムへ帰る。

ホテルで茶を呑みベランダで博物館の目録を見ていると、垣根の外からジブシーの女だというのが英語でカルタ占いをしてやるという。いらないと答えたが小銭をやつた。それでも立去らずカルタを一枚とれというから一枚とるとダイヤのクイーンだつた。ここへおかねを置けといふ。さつきやつたじやないかと言うと、

あれは煙草一本だ、もつと置けという。かわいそうちからもう少しやつて、さよならをし、占いはして貰わなかつた。

さつき貰つたのは「アテネの博物館（複数）」という英語版で、ベナキ博物館のことだけでなく、ビザンティン博物館などいうのも載つている。これは見ておく必要がある。今日見たものの中に稻妻のゼウスというのがあつた。解説書によると一九二九年にエウボニアで発見された由。腕は折れていたのをついだらしい。つぎ方はカラマノスという人が指導したとある。國立考古博物館は修理をしている様で、正面からではなく、横のポリテクニオンの方から入つた。

今日は昨日よりだいぶ涼しい。ホテルへ帰つて休んでいるとき果して雨が降つて來た。しかしにわか雨だからぢきに止んだ。今日の午後はギリシア美術史の勉強をした。夕食にはギリシア語のメニューを読もうとする程の元気が出て來た。マカロニアは当然スパゲッティ、カルボージといつたら西瓜を持つて來た、エトセトラ。

初めてこの宿へ着いたとき、此處は何という所かときいたらカバンなどへ貼るレツテルをくれた。それにはラテン字で、オテル・リド、パレオン、ファリロン、グレースとあつた。番地をきいたら六七という。今夜部屋に貼つてある何やら注意書のようなものを見ていたら、リドというのはギリシア文字ではリンクトとつづるらしい。

『ももんが』一九九一年九月号

一九五三

九月十四日 月曜

十時ごろ宿を出て今日はビザンチン博物館へ行くことにする。地図で見当をつけて行つたらすぐ分つた。キリスト教関係のものばかりだが、彫刻には彫りの深いものがある。これが特徴かも知れない。出口でベナキ博物館を尋ねたらアメリカ大使館の向側ということで、すぐに分つた。ここは少しげてものの感じがして種々のものがある。刀剣、ピストル、鉄砲、それから耳環などの装飾品、また服装の模型は面白かった。テツサロニカ、キクラデス、クレタなど。装飾品には金を使つた精巧なものがあつた。それからペルシアの織物、クレタのレースなど。時代はいつごろのものか、概ねこの博物館は解説が不十分である。

そこを出て喫茶店でコーヒーを呑む。例のカフェ、チュルクだ、これしかないのである。ティーをきいたら無いとのこと。靴みがきの少年が入つて來たので磨いてもらう。この町を歩くと靴にほこりが着くのである。

憲法廣場の近くに本屋があつたから行つてみたら八一二、五九と書いてある。もう十二時をだいぶ過ぎているから、午後五時まで待たないと開かないわけだ。アテネの晝休みはずいぶん長いものだ。アテネの町を小高い所から見るとイスラエルの景観に近い。周りの山は赤茶けていて木が少くてひからびた感じだ。それでもアテネの方が木が少し多い。町の家は白い壁で屋根は明るいといしや色が多い。

夕方早く宿へ帰り、明日行くコリント、エレウシス、ナウプリオの案内記などを読む。

九月十五日 火曜

朝食を早くするように頼んでおいたので、七・一五のバスに乗り七・四五キング・ジョージ・ホテルの前へ着いた。クック社のバスは八時きっかりに発車した。間もなくダフネ着、古い教会を見る。堂内の絵は十三世紀に修復したものという。そこから少し行つたところがエレウシスで大きな廢墟である。丘の上の博物館

を一巡した。彫刻が主であった。

次はコリント、神殿跡に七本の石柱が立っている。それは一つ石でライムストーンのこと、ここにも博物館がある。それからミケネへ向う。町に入る前に小亭でランチ。イギリスの学生とアイルランドだという二人連れとで食卓につくことになり、あとずつとこのメンバーで食事をする。

それからミケネの遺跡を見る。ライオンの門、墓、シユリーマンがアガメムノンの墓と断定したもの、その他みんなで六つあるよし。この辺の石は礫岩である。ミケネには博物館はない。強いて言えば遺跡全体が壮大な博物館である。

それからアルゴスを通つて六時ごろナウプリオへ着いた。ここで泊りである。一人づつ一部屋へ入るようだつたが、黙つて待つていたら二人室へ一人で入ることになった。モーターの音のする悪い室だがこれで結構だ。外にシャワーがあるから使えといったが、それほど暑くないから使わなかつた。

晝食のときと同じメンバーで丸卓子についてた。だいぶ話をした。食事は旅行社のあてがいぶちだが呑物は白分もちである。イギリスの学生にワインを振舞つたら喜んでいた。アイルランド氏がいつも呑むかときいたら、祝いのときだけ、高いのでね、と答えていた。

ナウプリオには萬里の長城を思わせるような、しかしそれよりも小規模な城砦がある。アシェット社の案内書にはバラメードの要塞と書いてある。今日見たアガメムノンの墓と称するものの中は石を組合せて作ったキューポラになつてゐる。直径が十五メートルあると説明していた。その外で近い所に岩屋があつた。

九月十六日 水曜

八時朝食、八時半出発となつていたので七時ごろ起きる。定刻出発。一時間くらいでエビダウルス着。大きな野外劇場を見る。音響効果が良いという説明があつたので、われわれは試してみることにした。石の段は五四ある。三〇くらいの所に巾二メートルばかりの中段がある。イギリスの青年が舞台の真中でしゃべるのが一番上の段で私は聞いていた。アイルランドの青年がベデカをぱたつと閉ぢる音まで聞きとれた。

そこから少し下つたところにある博物館を見る。繪はがきを買ひ、記念のため

ギリシア語のナウプリオン案内を買い、それを見ていたらスイス人だという男が話かけて来た。何処から来たのか聞いたらパリからと言う。この男がいちぢくを進めるので御馳走になる。甘くて旨かつた。

それから車で少し走ったところでティリントの遺跡というのを見る。一時ごろ昨日泊ったホテルへ戻りここで晝食。晝休みをして三時半出発、帰路につく。帰りには説明は要らないので案内嬢はここへ残つて仕事らしい。考えてみると彼女たちはわれわれの同業者である。考古学者の説明によりますと……というような説明をするのだが、教師も同じことでディイラックの理論では……などと平氣でしゃべっているわけだ。愛すべき同業者に別れを告げてバス上の人となる。

帰りはコリントの新市街で十五分ばかり休憩しただけでアテネへ直行した。アテネへ着いたのは七時半であつたから、四時間かかったわけだ。途中でギリシアの汽車を見た。バスの中でフランス語を話す青年が「エキスプレス」などと皮肉を言つていた。ギリシアの松は日本のと異なつて黄色を含んだ緑である。枝ぶりもイタリアで見たのに近いのは当たり前であろう。

八時リドー・ホテルへ戻る。七日か八日の月が出ていた。二日の旅行はなかなか良かつた。三回食卓を共にしたイギリスの学生とアイルランドの青年も好運な巡り合わせであつた。アイルランド氏はモダン・グリーケを勉強して来ているのもイタリアで見たのに近いのは当たり前であろう。

九月十七日 木曜

今夜カイロへ立つので今日は宿で夕方まで休養することにした。一昨日と昨日とかなり肉の入つた食事をしたので今日は朝食ぬきにしてゆっくり寝た。晝はスパゲッティとメロンだけにしておく。

六時宿を出て飛行場へ行く。八時発の予定だつたが三十分ばかり遅れて出航。しばらく飛んでから燈火がたくさん見えて來たのでアレクサンドリアだろうと思つた。程なくカイロへ着いた。現地時間で十二時であつたから時計を四五分進め。パスポートの検査などすべて緩慢で町のTWAの事務所へ着いたときは一時をかなり過ぎていた。オтель・デ・ローズへ行つてドクター・カワキタに頼んでおいた者だと言うと、承わつておりますとばかり、すぐに室へ案内してくれた。

九月十八日 金曜

七時ごろ起きる。八時朝食をとり、ナショナル・バンクの町名をきいて町へ出る。エル・ニルときいてカイロへ来たなと思う。本屋で地図を買い、エル・ニル街を教えて貰う。ナショナル・バンクはすぐに分つた。ギリシアの金を当地の金に替えてもらおうと思ったら、それはアテネ国立銀行だという。それもすぐ近くであった。六五万ドラクマで六ポンドなにがしか呉れたから、一万ドラクマで一エジプト・ポンドというわけだ。

地図を見て國立博物館へ行く。アラビアのだらりとした服を着た男が寄つて来て案内をしようという。すげなく断るのも氣の毒のような気がしたので頬むことにした。英語とフランス語のちゃんぽんで説明する。博物館を終るとシスター・デル（城砦）へ行かないかというから行くことにした。大きなモスクがあつて大勢の人々が礼拝をしていた。晝の礼拝であろう。モスクの庭からギザのピラミドが三つ見えた。サッカラの段のあるピラミドも遠くに見えた。

次にバザールへ行く。ここは案内人連れて来て良かつた。独りでは歩けないところだ。種々の土産物を賣る店がある。とうとう香料を賣る店へ連れこまれた。ジャスミンの小瓶を一つ買うことになる。一ポンドだが、三箇なら二ポンド半にしておくと言う。香料店でアラブ式コーヒーを呑む。車で宿まで帰り、午後ギザのピラミドへ案内すると言うから二ポンドで頬むことにする。

三時の約束だから玄関へ出ると案内人はちゃんと待っていた。車に乗りナイル渡つて動物園の脇を通りピラミドへ着く。馬に乗るか、ラクダに乗るかというのでラクダに乗りスフィンクスの傍まで行く。そこで下りて古代の墓所らしきものを見る。次はピラミドの中へ入る、坂になつた道ができる。かなりすすんだところに廣い場所があつて王妃の墓所という。もっと高い所が王の墓だというので其処まで登る。そこがピラミドの高さの丁度半分という。一番大きいピラミドの高さは一五〇メートル。

さつき乗つて來た自動車が五時にさつきの場所へ來るように約束しておいたので、それに乘つて宿へ帰る。案内人はギザの近くに住んでいるそうで、少し乗つたところで下りた。明日サッカラへ案内しましようと言うから、それはきつぱり断つた。彼は公認の腕章をつけた案内人だが、油断はできない。初めの約束のほかにだいぶ取られた。

昨日牛肉の脂のところを残せばよかつたのに皆食べてしまった。そのせいか腹具合が良くない。疲れも少したまつたのかもしれない。朝食はぬいて寝ている。しかし十時ごろ銀行へ行つて金を替えてもらう。ついでにスカンディナヴィア航空へ行つて時聞を確かめておく。荷物は明晚五時半までに当事務所へ持つて來ること、本人は明晚の一時半（正確にいると二十一日一時半）に來ること。

そこを出て宿へ帰ろうとすると、青年が近づいて来て昨日ピラミドでお見かけしましたと言う。案内でもしようというのかと思つたら、ガイドじゃない学生だが。見物のお手伝いをしようという。やっぱりもぐりのガイドじゃないか。要らないことわる。私がアシエット社の案内書を持つていてのを見て、それが分かることかと抜かしやがつた。断られたのがくやしかつたのだろう。

宿へ帰り晝食ぬきで休息。晩はスパゲッティ、サラダ・菓物を食べる。

九月二十日 日曜

腹具合はよくなつた。朝食はちゃんと食べられた。これで歩けるだろう。今日はアラブの博物館を見に行く。中にいた男が説明をしたまではよかつたが金をくれという。あいにく小銭の持合せがなかつたので切符売場で細かくして貰い、どのくらいやつたものか相談したら五ピアスターもやればいい、というのでそれだけ渡してさつさと出でてしまう。

それからエジプトの博物館をもう一度、今度はひとりで心ゆくまで眺め、目録も買う。出たところで先日の案内人が自分を見つけ近づいて来たからグドバイと言つてやる。

宿へ帰つたら川喜田氏に會えた。午後サツカラへ行く積りだというと、公使の息子が近く寄宿舎へ入るので、その前にサツカラを見たいと言つていたから、電話で都合をきいて一緒に行きましょうのこと。公使館へ立寄つて三人で行くことになる。公使は与謝野秀氏、坊ちゃんは馨ちゃんという。ソリマン・パシャで拾つたタクシーはサツカラを知らないというので、ピラミドの近くで別の車に乗つたが、その運転手も行つたことがないらしく、途中でアラブ人にきいたりしてサツカラに着いた。段のあるピラミドを眺める、墓を三つ見る。すばらしい壁画がある。まだ図録が出来ていないのであるらしい。

やがて夕方になつて來た。砂漠に日が沈むのを見た。帰りにメンフィスの遺跡

を通った。ラムセス二世の大きな石像が地上に横たわっていた。近くにアラバスターのスフィンクスともう一つ何かの像があった。遺物はこれだけらしい。公使館へ寄つて公使夫妻にあいさつをする。ご馳走になる。川喜田氏と一緒に宿へ帰り、自分は今夜おそらく立つからと言つてお礼とお別れの言葉を述べる。十二時ごろまで宿で休息し、それから航空会社の待合所へ向つた。

九月二十一日 月曜

一時三〇分バスが来て飛行場に向う。飛行場へ着いたら三十分くらいおくれるという。エジプトの紙幣と小銭が残っているので、繪はがきや紙ナイフなどの土産物を買つてエジプトのかねをエジプトに返した。銅貨がまだ少し残つていると言つと賣店の人が、スーザニルにお持ちなさいという。

飛行機に乗り込んだのは四時ごろであつた。四時十五分ごろ飛び立つ。隣の座席はあいていた。眠ろうとしたが、眠れなかつた。一時間くらい経つたかと思うころ外を見たら明るくなつていた。窓際の席だったので下を見ると紅海であつたが、たちまち渡つてしまつた。狭いものである。アラビア半島の砂漠の上を飛ぶ。真直ぐな自動車道のよう、あるいは城壁のようにも見える線が走つてゐる。あれはパイプラインであろうか。道路らしいものはもつと屈曲したのがある。アラビア砂漠の地形がよく見える。ワーデイ即ち涸河も認められる。

それからずつと眠つたらしい。カラチへ着いたのは現地時間の午後四時半であつた。そこで約一時間休む。東へ帰るときは次々に時計を進めなければならない。

九月二十二日 火曜

月が沈むころラングーン着。カラチから乗つたドイツ人が隣りの席へ腰をかけたので、この人と話をする。東京へ行くそうである。ラングーンから一時間半くらいでバンコク着。朝の七時ごろのようであつた。ここで朝食になつた。あとは東京まで止まらずで十二時間かかるという。夕方まで眠る。

夕方六時ごろ今ミヤコ島を通過しましたと案内嬢が言いに来た。それから間もなく点々と島が見えて來た。下の方の薄雲の中に虹が立つてゐる。今夜は月がまんまるだ。十時無事羽田に着いた。

一九五三年八月学会のためイスラエルへ行つた。これは公務出張であつたから、会議が終つたら直ぐ帰国するのが本筋であるが、少し足を伸ばせばギリシアとエジプトという古い文明の地があるから、アテネとカイロだけでも一回見ておきたいと思い、私費旅行を追加してもらつたのである。しかし南国の入園査証を日本で貰う暇がなかつたので、それはパリで貰うことにして、パリへ行つた理由はもう一つある。イスラエルの学会にはドイツの学者が来ていないので、誰か科学史の学者に合いたいと思い、その連絡もパリで取りたいと思つたのであつた。マイソツまで行くには行つたが、夏休みのため誰にも合えなかつたが、それが切つかけとなつて文通の道が開けた。一つハブニングがあつたのは、イスラエルの学会を終つて西へ向おうとしたとき、パリで交通関係のストライキが起つたというので、容子を見るためイタリアからスイスへ入つて二三日を送り、アルプスの氷河を見ることができた。ドイツからの帰りにチューリッヒに降りて、アインシュタインを偲んだり、ミラノでレオナルドの「最後の晩餐」を見るなど道草を食いながら憧がれのアテネに着いて数日を送つた。それからカイロへ渡りここにまた数日の見学をしたがである。

この部分は全く私的な日記であるから日記帖のまま載つてあつたが、前の「イスラエル日記」が東でなく西へ向つて飛び立つ所で終つているので、尻切れとんぼのようだから、そのつづきも「ももんが」なら載せてもらえると思い今岡原稿用紙に書き写したので、やのせこ多少取捨選択して体裁を整えたつもりである。長い間紙面を提供して下せつたことを「ももんが」の皆様に感謝する。

なおイスラエルを含む一九五三年の旅行について当時新聞や雑誌に発表した文とラジオ放送に次の五編がある。（一九九〇年八月）

- エルサレム便り　「読書新聞」一九五三・八・一四
- エルサレムを訪ねて　「東京理科大学新聞」一九五三・一一・一
- イスラエルの印象　「文化放送」一九五三・一二・二八
- ベールシユバの旅　「旅」一九五四・一
- アルゴスの旅　「東京理科大学新聞」一九五四・六・一一五

追記　「道草日記」の最初の方の八月二十日の条で、ジュネーヴで雷鳴をきてシラー（日記では古風にシルレルと書いた）の「ウイルヘルム・テル」の一場面を思い出している。そうして短い引用をなし、昔教科書で習つたのだから間違いない、と自信のありそうなことをかいしている。今度活字になつたのを読み返してみて、引用はあれで良かつたのかどうか、疑問に思われて來た。

手もとにテキストがないのでシラー全集の該当する部分を借りて来て当つてみると、やはり間違つていた。あやしむ Es donnernd e Hben, ... (Schi ller s Werke ,

Nationalausgabe, Weimar, 1980, X, 132) で動詞が単数でなく複数であった。また「壇に所だ」この部分が抜けていた。記憶というものは当てにならないものである。しかしこの上で雪が鳴つてこの情景はせつあつ覚えていたので、たまたまそつこつ情景に接して、「ナル」の一場面が思ひ出されたので、全くの虚構ではないのである。

引用箇所は第一幕第一場の初めの方である。舞台はフィアワルトショトナーンゼーの湖畔で、背景には高い山々が連つている。初めに漁師の子供が小舟の中でうたう歌があつて、次に牧人の歌、その次に船山の上で狩人のうたう歌の冒頭が引用の所である。

私は一九二二年から一九三年にかけて、高等学校三年のとき岩元さんからこれを習つた。岩元さんは一年のとき文法で脂をしほられたので、こわい先生であることは良く分かつていていた。「カイルヘルム・テル」を習つた最初の日のこととは忘れられないほど鮮明に記憶している。先生は前の方にいる生徒に「君、ナイフを貸して畀れ給え」と書いてナイフを借り、レクラム本のページを切つて、それからおもむろに「漁師の子供が小舟の中でのつた」ところのように始めたのである。

私は何と気障なことをする人だろうと当時思つた。芥川龍之介は大学を出て間もないころ海軍機関学校であつたかで英語の先生をしていたそうだが、ある日下読みせず教室に臨む破目になつたことがあつて、そのときの感想をあらしの海へボートを乗出すような気持であつたと書いている。若い教師ならこれが本音である。岩元さんはあのじろもひ劫を経た大先生であつたから、シリーなど下読みせずに講義できるはゞ博識だつたろうか。五十年ぶりにシリーを読み返してみて、この疑問はまだ氷解したとは言えない。

(一九九一年八月五日)

『ももんが』一九九一年十月号

大正十四年九月、田端の大龍寺で子規忌アララギ歌會があつた。私はこのとき初めて歌會というものに出席した。アララギに入會したのはその前年で、赤彦先生の面會日にはたいてい出ていたから、そこで同席した人はいたはずだが、まだ顔見知りはできていなかつた。座に東大の帽子を持つた男がいたから、よろしくと言つたら森本治吉君であつた。彼はもう一番前の一段組に出ていたから名前を知つていたのである。

やがて會が始まり、まず子規の墓に詣で、それから歌評になつた。選者として上座に坐つておられるのが土屋文明先生と分つた。末座の方にいたのでお顔はよく見えなかつたが、あの透き通るようなお声を聞くことができた。歌を読みあげる役は、もう少しあとで分かつたのだが辻村直さんであつた。

やがて私の歌が読まれた。そのとき出した歌をどういうわけか今でも思い出すことができるが、ここへ書く勇気はない。歌會に行く途中ででつちあげたもので、尾花の先に赤とんぼがとまつていて、夕方になつて風が寒くなつて来たというようなもので、おまけに秋という言葉まで入つていた。道具立てが多過ぎるね、と土屋先生から一言いわれて、なるほどそうかと思つたのである。

これを切つかけにしてそれから歌會に出るようになり、知り合いも出来るようになつた。山口茂吉君はその最初の一人である。またアララギ発行所へ校正や発送の手伝いにも行くようになり、高田浪吉、藤沢古實などの先輩やその他の諸君をも知るようになつた。

大正十五年三月末、島木赤彦先生がお亡くなりになつた。それから暫らく経つたある日、山口茂吉君が君はどうするんだ、と尋ねるので私は即座に土屋先生にお願いするつもりだと答えた。すると山口君がそれじゃお願しなくては駄目だ、これから行こうと言うのでついて行くことにした。下落合の先生のお宅へ着いたのは夕方であったが、先生はお留守であつたので奥様によろしくお伝え下さいと言つて辞去した。それからしばらく経つたある日、発行所で土屋先生のお目にとまり、先生の方から矢島君せんだつて家へ来ててくれたそつだね、と言われたので、

よろしくお願ひしますと言つて頭を下げた。これでお願いのことは完了したのである。

それから土屋先生の選の所に歌が載るようになつた。また暫らく経つたとき山口君が今度君の歌は一段組だと教えてくれた。彼は私などとは比較にならないほどひんぱんに発行所へ出入りしている情報通であつた。一段組に乗せてもらえるのは有難いことで、それにはげまされたりもして、毎月歌を少しでも出していた。しかし多くは作れないたちで誠に貧弱なものであった。

また一方で、赤彦先生から二つ（物理と歌）やるのはむずかしいぞと言われたのを時に思い出し、専門の勉強をしなくてはならないとも思つた。私は大正十五年にどうやら卒業し、工学部の方であつたが講師にしてもらつたので、なおさらなまけていては申訳ないのであつた。そんな訳で昭和六年ごろから作歌がほとんど無くなつた。それでもアララギの會合には出でていた。

講師でも東大構内のいわゆる山上御殿と呼ばれた集会所を借りることができるので、あそこでアララギ歌會を開いたことがある。世話役は犬丸秀穂君で、彼が発案者だつたのだろう。土屋先生が出席して下さつた。学生では医科の出月三郎（アララギでは小松三郎）君がいたが、その他の諸君は記憶していない。山上會議室はあまり居心地がよくないので、本郷三丁目の明治製菓の二階の喫茶室へ會場を移した。このときも土屋先生が出て下さつた。また篠遠喜人さんが見えて隣合せに坐つたのを覚えている。篠遠さんも先年亡くなつてしまつた。

昭和十六年に私は京城大学へ理工業部が新設されたのへ赴任することになつた。その前に齋藤先生と土屋先生へごあいさつに伺つた。土屋先生がいつ立つのかと言われる所以日時を申上げたら、東京駅まで来られたので、アララギの知合いがびっくりしていた。先生は京城に守永さんという女性の會員で世話好きの人がいるから、女中を雇うなど守永さんに頼むとよいとおっしゃつたので、その通りにした。また京城へ行つてからのことであるが、大学と隣り合つたところにある医学専門学校でたしか生理学を教えている大塚九二生さんという人がいたので、訪ねて行つて知り合いになつた。

昭和十九年に文壇の人々が何人も軍属として北支へ出掛けた。土屋先生も正式には何という資格であつたか、とにかく北支へ行かれて、帰りに京城へ寄るという情報を大塚さんから貰つた。通知を受けたその日時に京城駅に行つたら先生は三

等車から降りて来られた。私に向つて小林勇が二等車にいるから會つてやり給えと言われる所以、二等車へ入つて行くと小林君がいた。彼は暖かそうな外套にくるまつていて、土屋先生からきいたと言つたら何だかまり悪そうに私には思われた。幸い停車時間は短かいから私はすぐに二等車から降りた。

先生の宿は大塚さんたちが用意したのであろうが、数人のアララギの仲間たちと私もお伴をした。京城大学が管理している何とか文庫に朝鮮の古い書物を収蔵しているので、おもてなしにならうかと其処を見せて貰うようにしておいて、翌日だつたが、それを申上げたら暫く考えておられたが、止めておこうと言われた。

京城へは一泊くらいされたかと思う。アララギの會員が集まつて来て、先生に何か書いて貰うことになる。色紙や画用紙に何枚かお書きになつてから、五味君や矢島君は色紙を書いてくれなんて言わないからな、とおっしゃりながら「ほこり立て羊群うつる草原あり黄河の方はやや低く見ゆ」と書いて私に下さつた。私はすぐに「かたむける麓の原の村二つ家立ちひくく土につきたり」という『ふゆくさ』にある富士見高原の歌を連想した。また私は、「ほこり立てヨウグンうつるソウゲンに」と音で読んでいたが、引揚げて来てから頂戴した『蕙青集』をみるとそれぞれ羊群、草原と訓みがついている。何れにしろ実に新鮮な感覚であると思う。

京城から引揚げて来てから、また土屋先生にお會する機會ができた。招和二十一年の何月であつたか、牛込の旧陸軍痛院でアララギの集まりがあつた。何十人か来たように思う。土屋先生が出席されたのである。そのとき『蕙青集』を頂戴したと記憶する。これは七月の発行であみから、夏か初秋のころだつたのだろう。

昭和二十二年に石原純先生が亡くなつた。早くアララギを離れたとはいえ、伊藤左千夫の弟子であり、歌集『靈日』は前から定つていたこととはいえアララギ叢書になつていい人であるから、アララギに一言もその死について記事がないのは良くないと思い、私は「石原純先生」という原稿用紙五枚くらいの文を書いて五味保義さんへ提出した。五味さんから土屋先生があれで良いと言われたということで、それは「アララギ」十月号の巻末六号記事の中に印刷された。

それからだいぶ経つて一九八一年(戦後の記憶は西暦によつてゐる)に科学史の若い仲間が石原純研究を始めていて私にも相談があつたので、石原純の科学以外の活動の調査を受けた。それは歌とエッセーの分野である。石原純は『靈日』(大

正十一年)を出してからは定型を捨てていわゆる新短歌なるものを作った。そうして幾つかの雑誌を主宰したので作品が散在している。その中の五十数首を集めて『ももんが』に載せたので、土屋先生にはお送りした。また歌論とエッセーについても同誌に報告を書いた。しかしこれらのものを先生はみて下さったのか聞くことはなかつた。

歌の方では私は極めて怠惰な生徒であつたが、土屋先生の知遇を得たことは私にとって忘れることができない幸いであった。

(一九九〇・一一・一五)

付記 土屋先生がお亡くなりなつたとき、「ご遺志により葬儀はおこなわず、後日アララギの方で偲ぶ會を催す」ことが報じられた。腑甲斐ないことだが私は近ごろ視力も脚も弱くなつて、独り歩きはつつしんでいるので、ご葬儀があつても行かれそうもないし、偲ぶ會も同様である。そこで取敢ずこの一文を草して哀悼の意を表したのである。これはこのまま蔵つておけばよいのだが、田中君が好きなことを書けと言つてくれる所以送ることにしたのである。これを書きながら思い出したことがあるので付け加えておきたい。

一九八九年二月一〇日の朝日新聞の夕刊の「余白を語る」という欄で「土屋文明さん(歌人)」と題するインタビュー記事を載せている。その中に「私がふつうの中産階級の出だつたら、物理関係の学校へ進んだと思いますよ」という先生の言葉がある。これには電気に打たれたような衝撃を受けた。もし先生が物理の方へ進まっていたら……。最近刊行された歌集『青南後集以後』を拝見すると、人々にたすけられて生きて来た、ということが何度も歌われている。私は先生の生国のとなりの下つ毛の貧農の家に生れ、人に助けられて大学まで行つたので、先生のこの言葉には格別の感動を覚えたのである。

(一九九一・八・一三)

『 ももんが』 一九九一年十月号

(田中隆尚氏への礼状)

「道草日記」の中のアテネの博物館のところを現地の知識に基づいて丁寧にチエツクして載き有難うございました。八月号、九月十三日の初めの方に出て来るのは矢張り國立博物館であります。当時持つていたアシエット社の案内書を出して見ると、パティツシア通りに面して工科大学と隣り合つた所です。それから五行ほどあとに行を改めて「十一時そこを出る。正面は國立公園である」書いたのがいけなかつたので、そのため國立公園に面したベナキ博物館とお思いになつたのは無理もありません。念のため日記帖を出して見ると「十一時外へ出る。正面が公園になつてゐる…」とあり、國立公園とは書いてありません。それを淨書するとき國立公園だつたというイメージが浮かんで来てこうなつたのかと思います。アシエットのアテネ市街図を見ると「ミコゼー・ナシオナル」と記した一部は木立に圍まれていて、その奥つまり通りから遠い方に建物があるようになつています。この木立を公園と思つたのだと思います。この案内記は一九三五年版で、一九四八年の追加が赤紙で補足させ大ものですが、大勢は變つていないのでしょう。

同じ日付のもう少し行つた所にかるのも同じ國立博物館で、「横のポリテクニオンの方から入つた」というのがアシエットの市街図とも合致します。ポリテクニオンはさきほど工科大学と書いたもので、アシエットでは「エコール・ポリテクニク」となつています。考古博物館といふのは日記にはありません。

九月号の九月十四日に出て来るベナキ博物館はその通りで、蛇足ですが日記にも出てる The Museums of Athens(Athens, 1935) の一一一ページにベナキといつ人が自分のコレクションに回贈費を添えて國に寄贈したものとのこと、従つて國のものですが國立といつ言葉は入つていないです。アシエットの地図にも單に「コゼー・ベナキとなつていて、通りを隔てて國立公園(ジャルダン・ナシオナル)があり、その一角が旧王宮となつていています。日記には書いてありませんが、私はこのベナキ側でなく西の方の入口からこの公園に入りましたが、帰りに出た所は入つた所と異つてるので戸惑い、いかめしい制服を着た番人にきいて、これがベナキ側の入口であることが分りました。ビザンチン博物館は今地図を見ると其処から東の方へ少し行つた右側で、そのあたりはリュケイオンとなつているか

ら昔アリストテレスの学苑はそのあたりにあつたのでしょうか。よけいなことを書くとまた面倒なことになりかねないので止めますが、おかげでアテネの悪い出をあらたにしました。

(一九九一・九・二七)

『ももんが』一九九一年二月号

(藤井菊枝『うすらづき』批評特輯号)

歌手うすらづき有難うござります。この前はてつきり歌集と思い込み包をあけてみたら文集でがつかりしたとか、この次は歌集お願ひしますなど不躾なことを書きましたが、この度その願いがかなえられたので直ぐに読んでしまいました。あんなことを申しましたのはももんがお歌を拝見してきていたからです。雑誌でご文章を拝見した記憶はありませんでした。いつも拝見しているお歌はおおらかでしあわせなお方だという印象を受けていました。勿論生老と病死は人生につきものですが。歌を作る人はしあわせだと思います。思をのべることは精神衛生によることですから。ところで歌集を読んで行くとお祖父様が高崎藩に仕えたお方でお母さまが山本勘助の血すじとか、おおらかさの一端がわかつたような気がします。日本舞踊もお似合いと思います。踊りの歌数首の中では「舞の手の調べにあはせくりかえす心はこりて松の縁を」(一五六)が好きです。音調がよろしい。

いつもお歌を読んで感ずるのは私などが若いとき習った流派と親近性があるよう位思えるからでしょう。しかしこの度ももんが以前の作も拝見して仲々ロマンチックな歌もあると思いました。「傷負へる獣のことく山に来て若葉をしとねにねむらむとおもふ」(一六一)これはももんが時代でしたが(はかつての明星の中ににおいてもおかしくはないよう気がします。

一巻を通じて最も感銘を受けたのは「みどり児の孫を抱けばほのぼのと腕にのこる亡き子の感触」(一一一)でした。もう十数年前孫娘が小学校へ入るので何がいいかとさくと鳩時計がいいというので手を引いてデパートへ行きましたが、昭和十二年の六歳で亡くなつた娘が思い出されて何とも複雑な思いがしました。そのせいでこの歌が心にひびいたのかも知れませんが、佳作にちがいありません。テクニクの上でおもしろいと思ったのは、形容詞の副詞的用法とでも言うべきものです。「しめきれる障子開くれば薄暗にフリー・ジャの花白く匂へり」(四一)は文法的には匂うを形容している副詞ですが、意味合はフリー・ジャが白くて、そうして匂つているので自然に無理なくおもしろい表現となっています。一首において、「風渡ればたまゆら白き鈴の如ゆるる目をひくどうだんの花」の白き鈴も鈴が白いのではなくどうだんの方です。総べてお歌には「白」が目立ちます。これは私が石原純の歌の「黒」を意識しているせいかも知れません。小見出しに「白き焰」(

(一一五二)を見たときはこれは象徴的だ、五十年前の先生が汝は詩人と言われた
そうだが、その先生は先見の明がありだつたと一瞬思いましたが、誰か八つ手
の花をそう呼んだそうでオリジナルでないことが分かりました。「白」でもう一つ、
「白鳥の歌」という題名を見たとき、おやと思いました。フランス語で白鳥の歌
と申しますと最期の歌、文章なら絶筆となりますから。然し日本語ではそういう
意味はありませんから、これは全くの思い過しでした。

まだ感想はありますが長くなるのでここまでにします。以上は昨日の一気に読
んだ印象をそのまま書いたものです。

一九八八(ノーモア元年)・一〇・一七

昨日は用箋が尽きたとところで止めましたので、続きをもう少し書きます。そ
の前に一つ修正があります。四一ページの「フリージャの花しろく匂へり」につ
いて「しろく匂へり」に興味を覚え形容詞の副詞的用法などと大げさな言葉を用
いたので、もしこれが「しるく匂へり」だつたら平凡です。そこまではよかつた
のですが調子づいて一首おいて次の歌の上の句の「白き」が下の句の「どうだん」
来形容しているかのようになつたのは勇み足で、これは白い鈴に見えるでした。
白が目につくことを申しましたが一枚めくつた「血を吐きし…」は赤が出て来て
而も人間くさいのですが「ひとありて」だから若き日の感傷かも知れませんね。
人間くさいと言えば五五「世論」の初めの二つは注目すべき作品と思います。時
代を超えた花や鳥の歌もよいがもう一つ学徒出陣を含めた歌は日本の歴史に残る
事ですから、歌の作品として記録されてしかるべきものと思います。敢て社会派
の歌をよしとするのではありませんが、人間くさい作品ではこの三首をあげたい
と思います。

最近に近いところに井口きちが現れます上州では良く記録されているでしょ
うが、若い人には注釈がないと分からぬではないでしょうか。「武尊の麓」を
読んだ人はもう少ないのでしょう。あれは確か遺歌集であの人の場合は歌だけでは
救われない程深刻でした。

十月十八日追記

ホタカのkichisは井口ではなく江口だつたでしょうか。一高へ入つたとき茨城や
栃木の人はイとエの区別ができるといつてわらわれたのを思い出しました。そ
のうえ粗忽ものでして今朝郵便局へ原稿を送りに行って五百円だといわれ財布を
見たら四百九十五円しかないの往復二回いい運動をしました。了

一九八八・一〇・一〇

『科学史通信』一九九一年一百九十号

科学史に关心を持つものの団体を作ろうという動きは吾々よりも京都の方が早かつた。何年であつたか思い出せないが、科学史学会の胎動よりも何年か前である。京都大学と三高の先生方七、八人が発起人で、私も趣意書を貰つたので急速賛成の返事をしたが、この話は実らなかつた。平田寛さんの「科学史学会創立のじる」（『ガリレオの椅子』所収）によると資金が集まらなかつたからだという。平田さんの文中に菅井さんと私の所へその趣意書が届いたことも記されている。

わが科学史学会の動きは昭和十一年（1936）に現われている。忘れもしない。26 事件の起った日にその相談会を開くとの連絡を私も菅井さん受けて出席の返事をしておいたのだが、思わず事件が起つて私は欠席してしまつた。そのころ私は東大工学部に勤務していたが、みな緊張して中には反乱軍が大学へも来るかも知れないという者もいた。大学当局からは別に何の指令も出なかつたが、吾々はそれぞれ学科事務室に集まつてかなりおそらくまで情報を待つなどしながら不安な気持ちでいたのである。

その「私は相談に呼ばれるることはなかつたが、上記平田さんの文によると、菅井さんが金づるを見つけて着々と準備が進められていたのである。もし相談にあずかつたとしても、資金調達などには全く無力な私であるから、何の協力も出来なかつたと思う。昨年の講演「回想五〇年」で話したように、私は身辺多忙になつたことも重なつて、発会式にも参列できることになつてしまつた。ただ『科学史研究』に原稿を送ることで自分なりの協力はしたと思つていてる。

あれから五〇年、昔は人生五〇年といったほどで、決して短い時間ではない。よく今日まで続けられて来たものと思う。元来そう多くの会員があるはずのない学会であるから、まず順調に進んで来たものとして「同慶の至りである。

欧文誌の創刊は私も編集委員の一人であつた頃のことがあるので、第一期の誌名のことに少しふれて置きたい。あれは私の案ではない。数名の編集委員の中からあれを提案した人があつて決めたのであるが、提案者はノ君ではなかつたかと

思ひ。今更詮議するわけではないが、Japanese Journal……ここのは他の学会にもあるから、必ずよかないと思い私も賛成したのである。ところがしばらく経つと Japanese が Studies にせいかかるよりは解説する人があつて、「日本の科学史」の雑誌とこの品象を並べる懶れがあると言われて、なるせむかと感つた。

私はカーテンの Isis' また Osiris' ハインツの Thales などを考えて何かいい名称はないかと内心模索していたが、適当なものが思い浮かばないまま上記のような結果になつた。改められてラテン語のまばゆいばかりの雑誌になつたのは誠によろこばしい。外国からの寄稿もあつて結構なことである。どうかこの輝かしい誌名に負けない優れた欧文誌にして貰いたいと思う。名前は本来甲とことを区別するための符丁のようなものだが、仲々どうして「名は体を現わす」と謂われる大切なものである。さつぱり売れなかつた歌手が名を改めて売れるようになつた例もある。これは脱線してしまつたが、科学史学会の健在を祈ること切なるものがある。